

# 終助詞「ぞ」の機能

中崎 崇

## 0. はじめに

終助詞「ぞ」については、これまでの研究において「ね」や「よ」といった形式とは異なり、単独で取り上げられ検討されることも少なく、十分に議論されてきたとはいえない。こういった状況は、2019年現在においても現代語の終助詞「ぞ」を単独で扱った論文が管見の限り2004年以降見当たらないことから、大きく変化しているとはいえない状況と考えられる。

本稿の目的は、このような終助詞「ぞ」を取り上げて、その使用条件・使用制約について記述し、あらためてその意味・機能を規定することにある。特に、話し手の発話解釈に対する意図といった観点<sup>1</sup>から「ぞ」の意味の規定を試みることを目的とする<sup>2</sup>。

## 1. 先行研究と問題点

他の終助詞同様、「ぞ」も聞き手に対する発話態度といった観点から、その機能記述が試みられてきた。例えば、対人関係を構成する機能を持つものとして終助詞を考察し、「よ」と「ぞ」を「聞き手に対して、話し手の意思や判断を強く押しつける表現 (p.8)」とした時枝 (1951) や、話し手の話の場にのぞむ対人的態度を表明するものとして終助詞を分析し、「ぞ」を「ぜ」「わ」とともに「話し手がその相手に向かって、話の内容について『念を押し』という趣を示す (p.61)」とした佐久間 (1952)、「ぞ」と「ぜ」を終助詞とし「当然だとして聞き手に押し付ける態度をそれぞれ含んでいる (p.30-31)」とした佐治 (1957) などが該当する。

例外的に国立国語研究所(1951)は、以下の例をあげ「ぞ」の用法として、

- (1) こいつはいけるぞ。
- (2) おい、あれは吉岡だぞ。
- (3) 今日、あらゆる統制を撤廃しても社会の混乱を招く事はないと、  
何人が確言できようぞ。

「①自分の判断を自分に言い聞かせる。ひとりごとに用いる。(男性専用) (p.63)」をあげ、独話場面での使用を指摘している。もちろん、「②話の内容について念を押して主張する。対等または目下の相手に對する言い渡し・おどかし・警告などの語気を含む。(男性専用) (p.63)」 「③反語 (p.64)」といった聞き手への発話態度と考えられる用法も指摘している。

これらの研究は、国立国語研究所 (1951) を除いて、対話場面を中心に「ぞ」の意味を考察し、概ね「聞き手に対する念押し、判断の強調」と考えていると言えよう。しかし「ぞ」は、対話場面においてだけでなく独話場面にも用いられ、聞き手への念押し、強調といった意味記述では対話・独話両用法の「ぞ」を統一的に説明することは難しい。

これまでの研究とは異なり、独話場面での発話と文形式の相関から「ぞ」の意味・機能の記述をおこなっているものに森山 (1997) がある。森山は、「わ」とともに「ぞ」を気づき系の終助詞と指摘し、「『ぞ』『わ』ともに、すでに成立している認知的な判断に対して、その場で改めて強く焦点化することを表す (森山1997, p.182-183)」 「それまで活性化されていない認知的な判断を活性化するという明示的な意味がある (森山1997, p.183)」とその意味・機能を記述し、「ぞ」については「新たに生起した情報内容を意識の中へリアルタイムで書き込んでいくというべき意味 (森山1997, p.183)」と述べている。同様に独場場面の用法にも注目して「ぞ」の意味記述をとるものとして、野田 (2002) がある。野田は「ぞ」の機能を「その文の内容を新たに認識することで、既存の認識が変化することを表す (p.269)」と規定し、また聞き手に用いられると「文

の内容を聞き手に認識させて、聞き手の認識を変えようとしていることがあらわされる (p.269)」とする。この両者の主張は、概ね「ぞ」が、当該の内容を話し手が発話時において認識したことを有標的に示す性質や機能を有している、と考えている点で同じといえる。

当初よく見られた聞き手を前提とした用法記述の欠点（独話場面での機能をどのように説明するか）については克服できるかもしれないが、「焦点化する」「リアルタイムで書き込む」といったことが具体的に何を示すのか、またどのような事態であっても新たに認識さえすれば「ぞ」が付加されるのかといった問題があげられ、十分にその機能が記述できているとは言いがたい。

## 2. 使用状況

本稿においても、終助詞「ぞ」の機能の本質が、独話場面の用法に見られるような、発話時において話し手が何らかの事態や情報を認識することと関係があると見る。具体的な考察は3. で述べるが、その前に「ぞ」の使用状況について確認しておく。まず簡単に「ぞ」がどのような状況に用いられるのかについてみておく。

疑問文や命令文を含めすべての文タイプに後接可能できる「よ」に対して、「ぞ」は基本的には平叙文にしか後接することができない。

- (4) \*どうやって知り合ったんだぞ。
- (5) \*お前大学行かなくていいのかぞ。
- (6) \*さっさと行けぞ。

表出や表明といった文タイプにも後接することも可能である。意志表出・表明の場合、基本的には「よし来年は執行委員長になるぞ」のように、スル形の表現形式にのみ後接する。ただ、実際の用例では次の(7)のように、シヨウ形の表現形式に後接することもある。しかし、文語的なニュアンスとなり、口語での使用は考えにくい<sup>3</sup>。

- (7) 敵：知るがいい、戦において余計な重いなぞいっさい無用なり。

ハル：それが一番大事なんだよ。家族や仲間や世界のこと。いろんな思いがあるからこそ戦うんだ。

敵：心ここにあらず、か。馬鹿め、今目をさまさせてくれようぞ。

テレビアニメ『RAVE』

第32話「第5の剣 ブルークリームゾン」

願望表出・表名については(8)のようにタイ形と後接することが可能であり、こちらも口語では使用しづらいように思われるがSNSなどのいわゆる打ち言葉では使用されるようである。

(8) 蛍丸見たいぞ～

<https://twitter.com/KZnyaaaaan/status/1212770475455025152>

2020.1.3取得

平叙文での認識のモダリティ形式との共起関係でいえば、「ぞ」は敬候性判断を示す「らしい」「ようだ」「そうだ」、蓋然性判断を示す「かもしれない」「にちがいない」とは共起可能である。

(9) 天使：ドアをぶち壊したのはお前だろう。あれあけるのに十分はかかるっていう自慢の一品だったらしいぞ。まあ、だ**いぶ**無茶したみたいだし。

テレビアニメ『天使な小生意気』

第42話「大和撫子杯6 俺は強いぜ、泣いたふりクラッシュで決着だ～！」

(10) 頭がよくてイケメンでかっこいい人が運営してるに**ちがいないぞ**

[https://twitter.com/mk\\_23\\_robber/status/1211611008097107968](https://twitter.com/mk_23_robber/status/1211611008097107968)

2020.1.3取得

(11) 女にとっては、君以上に結婚は重大な問題なんだ、しかも、君との間に、いろいろと噂がでていることでもあるし、いまさら、この話がだめになれば、彼女は嫁に行けなくなる**かもしれないぞ**。

命題が表す内容を想像・思考や推論の中で捉えたことを示す推量の「だろう」については、次の(12)のように、実際の使用例として「だろう」に「ぞ」が後接する例は存在する。

- (12) 自分のボケで笑ってしまったし次こそネタボケ1位いけるだろうぞ

[https://twitter.com/spindle\\_sk2/status/1209546924384124928](https://twitter.com/spindle_sk2/status/1209546924384124928)

2020.1.20取得

「だろうぞ」も「しようぞ」と同様に、SNSなどの打ち言葉では観察される。しかし、会話などで「だろう」に後接する「ぞ」の例をみつけられなかったことから、「だろう」に後接可能であるとの判断するのは難しいといえる。ただ、後接不可能であると言い切るにしても、他の助動詞に比べ「だろう」だけが後接不可能もしくは後接しにくいのであれば、その要因や理由は問題となるだろう。

丁寧さといった文体に関わる制限については、「です」「します」といった丁寧体との共起の例を(13)のように用例として見つけることは可能であることから、制限はないように思われる。

- (13) 「おみごと！先生、よく見破りましたな。わたしの変装を見破ったのは先生がはじめてですぞ」

【ブンとフン】井上ひさし 新潮社

- (14) 目標が低い自分には100超えただけでうれしいですぞ

<https://twitter.com/bio0oid/status/1212784793479368705>

2020.1.20取得

これも実際に会話などでの使用例は、あまり見受けられないが、やはりSNSなどの打ち言葉では観察される。ただ、この場合も会話においては丁寧体との共起があまり見られず、仮に不自然と感じられるのであれば、その要因や理由を「ぞ」が有する機能から説明する必要があるだろう。

次に使用者の性差についてである。「ぞ」は、男性のみが用いる形式であると記述されることがあるが、上野（1972）や野田（2002）などに指摘があるように、独話や独話に近い発話の場合、女性が用いることもある。

(15) 養老：(略) 僕だって、実際にやったことあるんですよ。約束しておいて、やめたといって。えらい怒られたもの、あとで。

内田：なるほどね（笑）。

養老：世の中の人が全部そうやって暮らしているでしょう。

内田：あ、だんだんわかってきたぞ。 野田（2002）

この他、実際の発話ではないが、漫画や小説などでボーイッシュな女の子や女性でありながら男性的気質を有しているといった特定のキャラクターを演じる女性などが「ぞ」を用いることもある。

(16) (クリスマスパーティーの買出しをする芝村と速見。カップル占いのチラシをもらいお互い好きといえない2人は照れる)

芝村：いっ、いくぞ。次の買い物だ。

テレビアニメ『ガンパレード・マーチ～新たなる行軍歌～』  
第11話「言い出しかねて」

以下の(17)はSNSでの女性のやり取りであるが、SNSのような打ち言葉であれば、独話でなくとも女性の「ぞ」の使用が見られる。

(17) え、さきちゃんもすきすきだぞ

<https://twitter.com/smnLEsDuSBQExPz/status/1212790265993297920>

2020.1.20取得

以上「ぞ」が用いられる状況について概観した。次節より、「ぞ」が有する機能について、その使用状況や使用制約を手がかりに機能について考察を試みる。

### 3. 機能記述

1節で見てきたように、「ぞ」は聞き手が存在する場面に用いられるが、心内発話や独話場面など聞き手を前提としない場面でも用いられることも多い。また、そういった独話場面での発話における、話し手の事態・情報認識と何らかの関わりがあることが窺える形式である。

本稿は、終助詞が話し手の聞き手に対する発話解釈の意図を示す形式であるといった観点からその意味・機能の記述を行うことを目的としており、「ぞ」についても同様に考える。具体的には、「ぞ」の機能を、「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度（命題態度）の明示化であると仮定する。つまり、話し手が発話時において何らかの事態を「認識している」ないしは「認識した」場合に用いられ、そのことを有標的に示す形式であると考えられるわけである。

例えば、以下の(18)であれば、話し手が発話時において眼前の事態「何かが来る」を視覚的に認識し、そのこと(18')を「ぞ」の付加により明示している。

(18) (戦闘機が飛んでくる)

村人A：ん？

村人達：おっ？

子供A：あつ、な、なんか来るぞ

子供B：飛行機よ

テレビアニメ『機動戦士ガンダム』第13話「再会、母よ…」

(18') 話し手は、何かが来ると認識している。

当該事態についての話し手の認識を問う疑問文に対する応答文である(19)であれば、発話時における話し手の認識である(19')を「ぞ」の付加によって明示している。

(19) A：北海道どうだった？

B：寒かったぞ。

(19') 話し手は、北海道の気候が寒かったと認識している。

まず、最初にこの「ぞ」が担う「～と認識している」といった命題態度の明示化の機能とはどのような機能であるのかを検討する。具体的な考察に入る前に、「ぞ」が明示化する「～と認識している」といった命題態度動詞が示す認識活動の内実について触れておく。

まず、本稿では「認識する」といった命題態度動詞を、認識活動<sup>4</sup>一般を示す動詞として用いる。認識活動には、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚などによる感性的な経験がある。例えば、先ほどの(18)であれば、「何かが来る」といった事態の視覚による事態認識、以下の(20)であれば「誰かが泣いている」といった事態の聴覚による事態認識を示している。

- (20) その時です。「えーんえーん痛いよう、痛いよう。たすけてようー」と誰かが泣いている声がありました。「あれ！誰かが泣いているぞ」太郎さんは泣き声のするほうへ行ってみることにしました。

「豆太郎」<http://www.keio-jiken.org/OB/PDF/dowa/mametaro.pdf> 2007.7.10取得

また(21)(22)(23)は、それぞれ嗅覚、触覚、味覚による事態認識を示している。

- (21) 私：オイ。変な匂いがするぞ！

「上海の..臭い？匂い？考」

<http://chinachips.fc2web.com/repol/012111.html>

2007.7.10取得

- (22) ちょっとまでよ、体に何かあたっているぞ。

「身体部品作文 カリフラワ〜」

<http://www.urban.ne.jp/home/mii364/page197.html>

2007.7.10取得

- (23) 身の周りをキョロキョロ見ても、ちょうどいい感じに団子が置いてあった。それを拾って、月に向かって手を合わせた後、団子を口にした。「ん？ これ何か変な味がするぞ？」次の日



は腹が痛くて外に出られなかった。

「天体観測 ◆qwEN5QNa5M」

<http://bnsk.kirisute-gomen.com/25th/25th26.html>

2007.7.10取得

上記のような感性的な経験には、「～を思い出す」など、次の(24)のようなある事態の想起も含まれる。

(24) (結婚式や入籍がようやく終わって)

人生の一大イベント…本当にそんな1日でした。終わってからも忙しい。気がついたらもう4日経過してるし！そういえば昨日は誕生日だったぞっつと★

「Neutral Position」

<http://cute.neju.jellybean.jp/?eid=458113#trackback>

2007.7.10取得

また認識活動には、感性的な経験の他に、ある情報や事態に対する思考や理解といった知的な認識が存在する。

(25) ちよ：あっこの犬は忠吉さんです。

榊さん：忠吉さん？

ちよ：うちでかってるんです。

榊さん：な、なでもだいじょうぶか。

ちよ：はい。忠吉さんは人ができてますから怒ることはないんです。

榊さん：でもこれだともし噛まれたらしゃれにならないぞ。

ちよ：大丈夫ですよー。

テレビアニメ『あずまんが大王

THE ANIMATION』第7話「人格者」

(26) (授業中にもかかわらず天につっかかる御手洗。先生に注意される)

天：塾なんか行ってねえよ。

御手洗：なに。ど、どうしてなにもしてないのだ。

湖太郎：天ちゃんはひとりで何でもできるから。

小星：そう。ひとの力なんて借りる必要ないの。

御手洗：ば、ばかもの。そんなことでこのせちがらい受験戦争に勝てると思っているのかあ。

担任の先生：御手洗。うるさいぞ。

テレビアニメ『びたテン』第6話「新しいともだちの迎え方」(25)であれば、「これだと(このくらいの大きさの犬だと) 嘯まれたらしゃれにならない」といった事態の「推察」「理解」といった知的な認識を示している。(26)は、「(授業中に御手洗が騒ぐことが)うるさい」と「考える」「思う」といった、話し手の事態に対する知的な認識を示している。このように「認識する」といった命題態度動詞が示す認識活動には、感覚による「感性的な経験」と思考や理解による「知的な認識」の2つが存在し、「ぞ」は、こういった認識活動を示す「～と認識している」という命題態度動詞の存在を明示化している。

ただ、話し手が発話時において当該の事態を「認識している」場合であれば、どのような場合であっても「ぞ」を付加し、その存在を明示できるわけではない。

(27) 兵士A：所属部隊と名前は？

？兵士B：パーミリオン小隊所属、一条光だぞ。

先ほどの(19)と異なり、同じ疑問文に対する応答文でも(27)のように話し手の名前などの個人的事実を答える場合では、通常「ぞ」の使用は不自然なものとなる。これは、名前などの個人的事実、発話時において認識するといった(または改めて有標的に認識していることを明示する)事態でないことと関連していると思われる。また、有標形式である「ぞ」の付加が許容されるには、その付加に見合った効果が期待できるような状況が必要であることも示している。

次節から、具体的に「ぞ」の付加が許容される状況やその付加が制約

される状況を検討して、あらためて「ぞ」の機能について考察を行うことにする。その際、独話場面、対話場面に分けて検討する。

### 3. 1. 独話場面での機能

ここでは、3. で述べた「ぞ」の機能として仮定した「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度（命題態度）の明示化について、独話場面での使用を取り上げ検討する。

先ほども述べたが、本稿においては、「ぞ」は、通常話し手が発話時において何らかの事態を「認識している」ないしは「認識した」場合に用いられ、そのことを有標的に示す形式であると考えられる。またその機能を「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度（命題態度）の明示化であると考えられる。

独話場面に使用される「ぞ」もこの機能を有している。例えば、以下の(28)であれば、話し手が発話時において眼前の事態「レーダーが救難信号をとらえた」を聴覚により感性的に経験し、そのこと(= (28'))を「ぞ」により有標的に示している。(29)であれば、話し手が発話時において眼前の事態「メーターのランプが点灯している」を視覚により感性的に経験し、その経験から「兵器が動く」といった事態を知的に認識し、そのこと(= (29'))を「ぞ」により有標的に示している。

(28) (前の戦闘で遭難した友軍機の捜索にでかけたフラガ、しばらくしてレーダーが救難信号をとらえた音がなる)

フラガ：救難信号？とらえたぞ。

テレビアニメ『機動戦士ガンダムSEED』  
第24話「二人だけの戦争」

(29) (敵軍が来襲する中放置してある兵器を見つけるアムロ。兵器のコックピットにはいりメーターのランプが点灯しているのをみて)  
アムロ：こいつ動くぞ。

テレビアニメ『機動戦士ガンダム』

## 第1話「ガンダム大地に立つ」

(28) 話し手は、レーダーが救難信号をとらえたと認識している。

(29) 話し手は、ガンダムが動くと認識している。

このように独話場面においても、「ぞ」は感性的な経験、知的な認識を問わず、話し手の事態認識を有標的に示すといえる。ただ、先ほど(27)の用例でも触れたが、「ぞ」はいかなる事態であっても発話時において認識さえすれば付加できるわけではなく、その付加にある種の制限がある。つまり、単純に「～と認識している」といった命題態度を表す形式であるとはいえない。そこで次節から、「ぞ」の使用制約を確認し、あらためて「ぞ」の機能について考察する。

### 3. 1. 1. 「ぞ」の使用制約と使用状況

本節では、「ぞ」の使用制約と使用可能な状況について検討する。まず「ぞ」を付加して「～と認識している」といった命題態度の存在を明示することが不可能な事態について考える。

(27)の対話場面での用例でみたように、いかなる事態でも事態認識さえすれば「ぞ」が付加されるといったことはない。独話場面でも同様であると考えられる。例えば、次の(30)のような状況では、話し手が発話時において眼前の事態「かもめが飛んでくる」を視覚により感性的な経験をして、(30) A'のように「ぞ」の付加はやや不自然なものとなる。逆に「ぞ」を後接しない(30) Aは、自然な文といえる。

(30) (ただ呆然と海をながめている。そこへかもめが飛んでくる)

A: あっ、かもめが飛んでる。(発話後何もせずまた海をながめる)

A': ??あっ、かもめが飛んでるぞ。(発話後何もせずまた海をながめる)

上記から、独話場面においても「ぞ」は、単にある事態に気づくといった状況では、認識活動があっても付加できないことが確認できる。では

「ぞ」を付加し、「～と認識している」といった命題態度の存在を明示可能な事態とはいかなるものであろうか。まず、「ぞ」が付加可能な (28) (29) と (30) の発話の異なりについて検討してみる。

(30) と (28) (29) とを比べてみるとまず、話し手の発話後の行動に違いがある。(28) (29) の場合、「ぞ」を用いた発話終了後、認識した事態に関連する何らかの行動をとろうとすることが考えられ、実際行動を何もとろうとしないとは文脈(発話状況)からは考えにくい。例えば(28)の場合であれば、発話後直ちに「レーダーがとらえた救難信号の発信地点に向かう」といった行動であり、(29)の場合であれば、「兵器の起動を試みる」といった行動である。

それに対して(30)の場合、必然的に認識した事態に関連する何らかの行動をとることは文脈(発話状況)からは考えにくく、実際に行動をとらないと考えられる。このことは発話後、何らかの行動をとらない文脈のまま「ぞ」を付加した(30) A'が不自然に感じられることからわかる。

また逆に、発話後何らかの行動をとることを前提とした文脈の(28)に、(31)のような認識した事態に関連する何らかの行動をとらないことを示す発話後の文脈を付け加えてみると、不自然な発話と感じられる。

(31) (敵軍が来襲する中放置してある兵器を見つけるアムロ。兵器のcockピットにはいりメーターのランプが点灯しているのをみて)

アムロ：？こいつ動くぞ。(何もせずそこから立ち去る)

この(28) (29) と(30) の発話の異なりは、文脈(発話状況)と話し手が認識した事態の異なりであると考えられる。例えば、(29) の文脈(発話状況)において、話し手が認識した事態は、その事態を前提として、文脈から関連する何らかの行動(についての想定<sup>5</sup>)が導出可能である。例えば、以下のような行動(想定)である。

(32) 兵器が動く。(認識した事態)

(33) 兵器を動かすことができれば、敵に反撃ができる。(推論の前提)

(34) 兵器を動かしてみるべきである。(推論の帰結)

「ぞ」が付加されている(28)の場合についても同様に次のような行動(想定)が認識した事態から導出可能である。

(35) レーダーが救難信号をとらえた。(認識した事態)

(36) 救難信号の発信地点に向かえば、遭難している友軍機を救助できる。(推論の前提)

(37) 救難信号の発信地点に直ちに向かうべきである。(推論の帰結)

それに対して(30)のような文脈(発話状況)からは(28)(29)ほど明確な行動(想定)を、認識した事態である「かもめが飛んでいる」から導出することはできない。

以上から、「ぞ」が付加できる事態とは「当該の事態を前提として、文脈から関連する何らかの行動(想定)が導出可能」な事態であり、付加が制限される事態とはそういった想定<sup>6</sup>の導出が困難な事態であると考えられる。

2. であげた「よし来年は執行委員長になる」のような話し手の意志表出を表す文<sup>6</sup>に付加される「ぞ」についても、「当該の事態を前提として、文脈から関連する何らかの行動(想定)が導出可能」な事態の認識として考えられる。

(38) よし来年は執行委員長になるぞ。

(38') 話し手は、話し手が来年執行委員になると認識している<sup>7</sup>。

(39) 話し手が来年執行委員長になる。(認識した事態)

(40) 執行委員長になるためには、これまで以上の努力が必要である。(推論の前提)

(41) 話し手は、これまで以上の努力を行う必要がある。(推論の帰結)

(38)の場合も(28)(29)同様に、認識した事態を前提として、文脈から上記のような関連する行為(意志表現の場合、事態成立に向けて必要な行為)を導出可能であり、「ぞ」により(38')を有標的に示している。

ただ「ぞ」の付加可能な事態が、必ず何らかの「行動」の導出が可能であるわけではない。例えば (28) (29) と同様に、聞き手めあての発話ではない (独話相当) 次の (42) のような発話の場合、話し手は「話し手が国際電話をしていない」といった事態を知的に認識し、そのこと (= (42')) を「ぞ」により有標的に示している。

(42) 父：ゆかか？

娘：あ、父さん。誕生日おめでと。

父：よく覚えてたなあ。まだ東京か。

娘：えっ、私もうパリだよ。

父：ええパリ？ (電話を耳から離して) 国際電話してないぞ。

テレビCM「Vodafone」

(42') 話し手は、国際電話をしていないと認識している。

しかし、この場合話し手は、認識した事態「話し手が国際電話をしていない」を前提として、文脈から、例えば「いますぐ娘に国際電話かどうか確認する」「電話をきる」といった行動 (想定) を導出するとは考えにくい。

ただ、この場合、ある種の行動を導出するとは考えにくくとも、次の (45) や (46) といった想定を文脈から導出する可能性は有している。

(43) 話し手は国際電話をしていない。 (認識した事態)

(44) 国際電話せずに、パリにいる娘と電話ができない。(推論の前提)

(45) 話し手が娘と電話ができるのは不可解だ。 (推論の帰結)

(46) 娘がパリにいるのは本当かどうかあやしい。 (推論の帰結)

つまり、「ぞ」が付加される事態は、「当該の事態を前提として、文脈から関連する何らかの想定が導出可能」な事態といえる。また、導出可能な想定とは、ある特定の1つの想定というわけではなく、(42) における (45) や (46) のように、文脈から考えられるある範囲内での関連する想定といったものであると考えられる<sup>8</sup>。

(47) 「ぞ」が付加される事態

当該の事態を前提として、文脈から関連する何らかの想定が導出可能な事態（文脈含意を生じさせうる想定）

(48) 「ぞ」の付加が制限される事態

当該の事態を前提として、文脈から関連する何らかの想定が導出困難な事態（文脈含意を生じさせにくい想定）

### 3. 1. 2. その他の「ぞ」の使用状況

前節で「ぞ」が付加される状況と制限される状況についてみてきた。ここで、(47) 以外で「ぞ」が付加される状況や事態が存在するか検討する。

独話場面における「ぞ」の使用例として以下のような発話が存在する。

(49) (発明マニアの仁科学が魂チェンジャー一号を発明する)

仁科：ふふふ、ふふふふふ、ついに、ついにできたぞお。はははは。

テレビアニメ『しあわせソウのオコジョさん』  
第31話「科学君の恐るべき実験」

(49) 話し手は、魂チェンジャー一号が完成したと認識している。

(49) は、話し手が「魂チェンジャー一号が完成した」といった事態を視覚により感性的に経験し、そのこと (= (49)) を「ぞ」により有標的に示している。しかし、この場合、(28) (29) のように、認識した事態を前提とし、明確に文脈から関連する何らかの想定が導出可能であるとは言い難い。また (30) のように単にある事態に気づくといった状況とも考えられない。

この場合、話し手の認識した事態「魂チェンジャー一号が完成した」は、話し手にとって希望する（好ましい）事態であるといえる。次の (50) も同様の例である。(50) は、眼前の事態「プレゼントするためのご飯がたまってきた」を視覚により感性的に経験し、その経験から「話し手がためたご飯をまとめてプレゼントすれば、槌谷がよろこぶ」といった



事態を知的に認識し、そのこと (= (50')) を「ぞ」により有標的に示している。

(50) (飼い主の榎谷のために、餌の一部をこっそりためるオコジョさん)

オコジョさん：結構たまってきたぜ。こうしてためた飯をまとめて榎谷にプレゼントすればあいつきっとよるこぶぞお

テレビアニメ【しあわせソウのオコジョさん】  
第42話「妄想に踊る榎谷」

(50') 話し手は、ためたご飯をプレゼントすれば榎谷がよるこぶと認識している。

この話し手の認識した事態「話し手がためたご飯をまとめてプレゼントすれば、榎谷がよるこぶ」も、話し手にとって希望する（好ましい）事態である。

このことは、当該の事態が(47)のような事態でなくても、話し手が希望する（好ましい）事態を認識した場合であれば、「ぞ」を付加し「～と認識している」といった命題態度の存在を明示することが可能であることを示している。またこの場合、認識した事態がそういった事態であること（認識した事態に対する話し手の「好ましい」といった心的態度の存在）を明示する装置として、事態認識を有標的に示す「ぞ」が用いられていると考えられる<sup>9</sup>。ただ、次の(51)のような例も存在する。

(51) (萩原が自分のドラゴンとともにレイジに襲い掛かってくる。萩原のドラゴンは、レイジのドラゴンと比べ桁違いの大きさである)

レイジ：ずるいぞお。あんなやつとどうやって戦えってんだよー。

テレビアニメ【ドラゴンドライブ】  
第1話「眠れる龍」

(51') 話し手は、萩原が話し手のドラゴンと比べ大きいドラゴンで襲ってくることがずるいと認識している。

(51) は、眼前の事態「萩原が大きいドラゴンで襲ってきた」を視覚により感性的に経験し、その経験から「(萩原が話し手のドラゴンと比べ大きいドラゴンで襲ってくる)はずるい」といった事態を知的に認識し、そのこと(= (51'))を「ぞ」により有標的に示している。この場合の話し手が認識した事態は、話し手が希望する(好ましい)事態ではなく、逆に希望しない(好ましくない)事態であると言える。

上記から、話し手が認識する事態が希望する(好ましい)事態であるか、そうでないかに関わらず、認識事態に対して「驚き」「不満」などある種の心的態度が存在する場合に「ぞ」が付加され、そのことによりその存在を明示することが可能であるといえる。

### 3. 1. 3. 独話場面における「ぞ」の機能

これまで独話場面における「ぞ」の使用について検討してきた。その結果、3. で述べたように独話場面においても、「ぞ」は話し手が発話時に何らかの事態を認識した際に用いられ、「ぞ」の基本的機能として「[～と認識している]」といった話し手の命題に対する態度(命題態度)を明示する」といったものが確認できた。

また、「ぞ」を付加して上記の命題態度を明示する状況として、「当該の事態を前提として、文脈から関連する何らかの想定(文脈含意を生じさせる想定)が導出可能な事態を認識した」場合が考えられ、逆にそのような事態でない場合「ぞ」が付加されにくいことも確認できた。このことから、「ぞ」の機能として、話し手が発話時に上記のような事態を認識したことを明示する機能が考えられる。

次に、認識した当該の事態を前提とし、明確に文脈から関連する何らかの想定が導出可能であるとはいえない事態を、話し手が認識した際にも「ぞ」が付加され、その際話し手の認識事態に対するある種の心的態

度が存在することも確認した。このことから、「ぞ」の機能として、話し手の認識事態に対する心的態度の存在の明示化が考えられる。

最後に、独話場面で使用される「ぞ」の用例として次のようなものがある。

(52) (トイレから出てくる御手洗。先ほど答えられなかった質問の答えを思い出す)

御手洗：ふん、ふん。なーんかすっきりしたなあ。あっそうだ。  
今ごろ思いたしたぞ。人々国を守れと鎌倉幕府。なーんだ1192年じゃないかあ。

テレビアニメ【びたテン】

第6話「新しいともだちの迎え方」

(52') 話し手は、話し手が先ほどの質問の答えを思い出したと認識している。

(52) は、話し手が「(先ほどの質問の答えを) 思いたした」といった事態を認識し、そのこと (= (52')) を「ぞ」により有標的に示している感性的な経験の想起の例である。この場合も心的態度の存在の明示化のケースである (49) と同様に、認識した事態を前提とし、明確に文脈から関連する何らかの想定が導出可能であるとは言い難い (例えば当該の事態から「今すぐに質問の答えを出題者に伝えるべきである」といった想定を導出するとは考えにくい)。また、(49) のように「好ましい」「驚き」「不満」といった認識事態に対しての話し手の心的態度の存在が明確であるとまでは言い難い。

このような例は、(30) A のような単にある事態に気づくといった状況に近く、単にある事態を「～と認識している」といった話し手の命題態度が存在することを明示するだけの要素として働いている。

通常、「ぞ」を付加するには何らかの動機の存在が必要であると考えられるが、(52) のような例が少ないながらも存在することを考慮し、暫定的にこの種の「ぞ」の機能を、基本的機能と同じ「～と認識してい

る」といった話し手の命題に対する態度を明示するとしておく。

表1 終助詞「ぞ」の基本的機能

終助詞「ぞ」の基本的機能	
①	「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度（命題態度）を明示する

表2 終助詞「ぞ」の機能

終助詞「ぞ」の機能	
①	当該の事態が、その事態を前提として、文脈から関連する何らかの想定が導出可能な事態であることを明示する
②	認識事態に対するある種の心的態度が存在することを明示する
③	「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度（命題態度）を明示する

### 3. 2. 対話場面での機能

ここでは、3. 1. 3. で述べた「ぞ」の機能について、聞き手の存在する対話場面での使用を取り上げ検討する。基本的に対話場面においても、「ぞ」は3. 1. 3. の基本的機能を有し、基本的機能の現れ方の異なりとして3つの機能が存在すると考える。まずは、1つめの、文脈から関連する何らかの想定が導出可能である事態を認識したことを明示する機能からみていく。

#### 3. 2. 1. 「ぞ」の機能①

3. 1. 3. で述べたように「ぞ」には、「当該の事態が、その事態を前提として、文脈から関連する何らかの想定が導出可能な事態であることを明示する」機能がある。対話場面においても、同様であると考えられる。

(53) (スカイピアへの道中正体不明の敵に襲われたルフィ達、何とかスカイピアに到着、そこへ遠くから何か楽器の音色がする)

ルフィ：あっ、何の音だ？

ゾロ：おいっ、誰かいるぞ。あそこだ。

ウソップ：また例のゲリラか。

テレビアニメ『ONE PIECE』

第155話「神の国スカイピア！雲の渚の天使たち」

(53') 話し手は、誰かがいると認識している。

(53) は、話し手が発話時に「誰かがいる」といった事態を視覚により感性的に経験し、そのこと (= (53')) を「ぞ」により有標的に示している。この事態も次の (57) や (58) といった想定を文脈から導出することが考えられる。

(54) 眼前に誰かがいる。 (認識した事態)

(55) スカイピアへの道中、正体不明の敵に襲われた。(推論の前提)

(56) 先ほどの敵が再び襲ってくる可能性がある。(推論の前提)

(57) 眼前の存在は、先ほどの敵であるかもしれない。(推論の帰結)

(58) 眼前の敵に備えて、用心すべきである。(推論の帰結)

対話場面における、この機能を有する「ぞ」を付加する話し手の発話意図は、独話場面同様上記のような事態を認識したことを明示することにある。ただ独話場面と異なり、対話者である聞き手が存在することから、当該の事態が上記のような事態であることを聞き手に明示し、そのことで聞き手にも (57) や (58) などの想定を期待して (見込んで) 発話すると考えられる。実際に (53) の発話後、対話者がなんら行動を起こさなければ、同様の発話を繰り返すか、直接的に「用心しろ」といった命令文を発話すると考えられる。

次の (59) も (53) と同様の例である。この場合も発話時に「ながつきの鉛筆が落ちた」といった事態を視覚により感性的に経験し、そのこと (= (59')) を「ぞ」により有標的に示している。

(59) (隣のながつきの机の上にある鉛筆が落ちる)

仁歳：お、落ちたぞ。

(ぼーとしているながつき)

仁歳：おい、ながつき。

ながつき：なにかようか。

仁歳：これ落ちたっていつてんだよ。

テレビアニメ『HAPPY☆LESSON ADVANCE』

第12話「ナゼナゼ★むつきの家出」

(59) 話し手は、ながつきの鉛筆が落ちたと認識している。

この事態も、次の(62)や(63)といった想定を文脈から導出することが考えられる。また、話し手の発話意図として、聞き手に当該の事態がそういった想定を導出可能であることを明示し、以下のような処理を行うことを期待していると考えられる。

(60) ながつきの鉛筆が落ちた。 (認識した事態)

(61) 落ちた鉛筆を拾わないと、なくなってしまう。 (推論の前提)

(62) ながつきは鉛筆を拾うべきだ。 (推論の帰結)

(63) ながつきは鉛筆に気づくべきだ。 (推論の帰結)

そのことを示すように、発話後話し手が期待するような行動を起こさない聞き手に対して、同様の発話を繰り返している。

このように、対話場面においても「当該の事態が、その事態を前提として、文脈から関連する何らかの想定が導出可能な事態であることを明示する」機能を有する「ぞ」が確認できる。対話場面において、この機能を有する「ぞ」を付加する話し手の発話意図は、第一義的には当該の事態が上記の事態であることを明示することにある。

ただ、対話場面において、通常そのようなことを明示することだけ在意図していることは少なく、聞き手にも関連する想定を導出を期待しての発話となる。またこういった発話は、聞き手にとっても、(53)や(59)だけを復元し解釈するよりも、(57)や(62)までを導出し発話を解釈

するほうがより高い認知効果（関連性）が得られると考えられる。

次の(26)（再掲）などの話し手の発話意図は、単に聞き手が(26')だけを復元することを意図したのではなく、(66)の導出までを意図したものだと考えられる。

(26)（授業中にもかかわらず天につっかかる御手洗。先生に注意される）

御手洗：ば、ばかもの。そんなことでこのせちがらい受験戦争に勝てると思っているのかあ。

担任の先生：御手洗。うるさいぞ。

(26') 話し手は、授業中に御手洗が騒ぐことがうるさいと認識している。

(64) 授業中に御手洗が騒ぐことがうるさい。 （認識した事態）

(65) 授業中に生徒は静かにしているべきである。 （推論の前提）

(66) 御手洗は、直ちに静かにするべきだ。 （推論の帰結）

さらにこの機能を有する「ぞ」は、「～認識する」といった命題態度の明示化の機能から、推意<sup>10</sup>の存在を顕在化し、聞き手に推意の導出を促す機能に完全に移行する。

(67)（男にバニーガールの衣装を着させて、部活の宣伝させようとする）

「昨日はあたしとみくるちゃんがバニーで宣伝やったんだから今日はキョンの番ね」「はあ？」「聞こえなかったの？今日はあんたがバニーガール姿で宣伝なさい！」「アホか！オレは男だぞ！そんな気色悪いまねが出来るか！」

「真城の居間」

<http://white.ap.teacup.com/applet/mashiroyuh/msgcate20/archive> 2007.8.10取得

(67') 話し手は、話し手が男であると認識している。

(67) において「ぞ」は、「話し手が男である」といった事態に付加さ

れている。この「話し手が男である」といった事態は、話し手にとって自明なことであり、発話時にあらためて気づいたり、認識したりするものではない。また、聞き手にとっても「話し手が男である」といった事態は、外見や既存の想定などから自明な事態であり、仮に(67)を復元し解釈したとしてもそれだけでは、(67)を関連性のある(認知効果<sup>11</sup>が得られる)発話として解釈することはできない。つまり、(67)は、推意の導出を前提とした発話である。

このような発話における話し手の第一義的な発話意図は、(67)の復元にあるのではなく、次のような処理をし、(70)の推意を導出させることにある。

(68) 話し手は、男である。 (認識した事態)

(69) 男がバニーガールの衣装を着ることは、恥ずべきことである。

(推論の前提)

(70) バニーガールの衣装を着ることはできない。 (推論の帰結)

また(67)の用例は、当該の事態が話し手にとって自明な事態であっても、文脈から導出することでより高い関連性を得られる推意が得られれば「ぞ」が付加できることを示している。

3. でみた(27)(以下に再掲)の発話に「ぞ」を付加すると不自然に感じられるのは、(67)と同様に話し手にとって自明な事態であっても、(67)と異なり(27)の文脈からでは、導出することでより高い関連性を得られる推意の存在が明確でない(「ぞ」の付加による、発話解釈の処理コストに見合った認知効果が得られない)からだと思われる。

(27) 兵士A: 所属部隊と名前は?

? 兵士B: バーミリオン小隊所属、一条光だぞ。

このような発話に付加される「ぞ」は、「～と認識している」といった命題態度を明示するといった基本的機能の異なりや文体的な差などはあるが、中崎(2005)で述べた「よ」の機能のうちの1つである「当該の発話が字義通りの意味とは異なる内容(言外の意味)を有しているこ



とを述べる」と同じ働きをすると考えてよいだろう。実際、(67)の「ぞ」を(71)のように「よ」に置き換えたとしても、聞き手に同様の処理を促す発話として解釈できる。

(71) オレは、男だよ。そんな気色悪いまねが出来るか！

以上、対話場面において、文脈から関連する何らかの想定が導出可能である事態を認識したことを明示する機能を有する「ぞ」がどのように用いられるのかみた。次節は、対話場面における「ぞ」の2つめの機能である、認識事態に対するある種の心的態度が存在することを明示する機能について検討する。

### 3. 2. 2. 「ぞ」の機能②

ここでは、認識事態に対するある種の心的態度が存在することを明示する機能を有する「ぞ」の対話場面における用例を検討する。対話場面においても、この機能を有する「ぞ」の存在が確認できる。次の(72)は、話し手が「何かが釣れた」といった事態を視覚により感性的に経験し、そのこと(72')を「ぞ」により有標的に示している。

(72) (釣りをしている天使、さおにあたりがある。)

天使：おっうわー、またなんか釣れたぞお。

蘇我：ちょ、ちょっとまで。

天使：うわーい、ふぐだ、ふぐだ。うちで飼えないかなあ。

テレビアニメ「天使な小生意気」

第11話「デエトだメグ、見せてやるぜすごい男を！」

(72') 話し手は、何かが釣れたと認識している。

(72'') 話し手は、何かが釣れたことを好ましく思っている。

この場合も、独話場面での(49)(50)などの例と同様に、当該の事態は、その事態を前提とし明確に文脈からある特定の関連する想定が導出可能であるといったものではない。また、そのような想定を導出前提とした発話とはいえない。

この(72)に付加された「ぞ」も、認識した事態に対する話し手の「驚き」「好ましい」といった心的態度の存在を明示する装置として機能していると考えられる。しかし、明確に聞き手にも(72")のような想定  
の復元までを意図して「ぞ」を付加しているとは言えない。

ただ、次の(73)(74)では、発話後に「どうじゃ見たか、りん」「ムジカ！」と聞き手に呼びかけていることなどから、聞き手に(73')(74')  
を復元することだけでなく、(73") (74") の復元までを意図した発話で  
あると考えられる。

(73) (川で魚をとる邪見、なかなかうまくいかない)

りん：後ろ。

邪見：後ろ？前？

りん：前、前、前。あっ、そこです。

邪見：とったぞお。どうじゃ見たか、りん。

りん：すごいー邪見様。大物です。

テレビアニメ『犬夜叉』第76話「豹猫四天王の陰謀」

(73') 話し手は、魚をとったと認識している。

(73") 話し手は、魚をとったことを好ましく思っている。

(74) (待ち合わせの場所になかなかこないムジカ、ようやく現れる)

ムジカ：よっ、待たせたな。

ハル：おせーぞ。ムジカ！

エリー：心配したんだよ。

ムジカ：わりー、わりー。

テレビアニメ『RAVE』第25話「さらばソング大陸」

(74') 話し手は、ムジカが来る時間が遅いと認識している。

(74") 話し手は、ムジカが来る時間が遅いことを不満に思っている。

当然、聞き手にとって(73") (74") を復元し発話を解釈するほうが、  
復元しない場合よりも「ぞ」の付加による発話解釈のコストに見合った、  
より高い関連性（認知効果）が得られる。対話場面において、この種の

「ぞ」を付加する話し手の発話意図は、多くの場合このような効果を狙ったものと考えられる。

以上、対話場面において認識事態に対するある種の心的態度が存在することを明示する機能を有する「ぞ」がどのように用いられるのかみた。次節では、対話場面における「ぞ」の3つめの機能である、「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度を明示する機能について検討する。

### 3. 2. 3. 「ぞ」の機能③

最後に、対話場面における「ぞ」の3つめの機能、「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度を明示する機能についてみる。

この3つめの機能を有する「ぞ」は、先ほども述べたとおり独話場面においては、あまり見受けられない。ただ、対話場面においては、この機能を有する「ぞ」の使用はそれなりに確認できる。

3. でみた、当該事態についての話し手の認識を問う疑問文に対する応答文である (19) (以下に再掲) に付加される「ぞ」などがこれにあたる。

(19) A : 北海道はどうだった。

B : 寒かったぞ。

B' : 寒かったよ。

(19') 話し手は、北海道の気候が寒かったと認識している。

(19) は、話し手が「北海道の気候が寒かった」といった事態を感性的に経験し、そのこと (= (19')) を「ぞ」により有標的に示している。この「北海道の気候が寒かった」といった事態は、その事態をもとに文脈から関連する何らかの想定 (例えば、「聞き手が北海道に行く場合は寒さに気をつけるべきだ」など) が導出可能な事態、または発話を関連性のあるものとして解釈するために必ず必要な想定を導出する可能性がある事態とは考えにくい。また認識事態に対する話し手のある種の心的

態度（例えば「北海道の気候が寒いことを不満に思っている」など）が存在するとも考えられない。

こういった(19)などに見られる「ぞ」は、単に聞き手に対して「～と認識している」といった命題態度を明示するといった機能を有するものと考えられる。

この(19) Bのような、話し手の認識を問う疑問文に対する応答文に付加され「～と認識している」といった命題態度動詞の復元を働きかける「ぞ」は、(19) B'のように、聞き手に「～と述べている」といった発話行為述語の復元を積極的に働きかける機能を有する「よ」<sup>12</sup>と置き換えても不自然な文とはならない。

ただ、3. でも述べたが話し手の個人的事実を問う疑問文などでは、(27)（以下に再掲）のように「ぞ」を付加すると不自然になる。

(27) 兵士A：所属部隊と名前は？

？兵士B：パーミリオン小隊所属、一条光だぞ。

まず、個人的事実などは発話時にあらためて認識する事態ではないため、わざわざ有標の形式を用いて「～と認識している」といった命題態度動詞の存在を明示するといったことが考えにくいためであると思われる。また先ほども述べたが、(27)は文脈から、導出することでより高い関連性（認知効果）を得られる推意の存在が明確でない（「ぞ」の付加による発話解釈のコストに見合った認知効果が得られない）からだと思われる。

つまり、対話場面において、聞き手に向けて有標の形式である「ぞ」を用いて、命題態度動詞の存在を明示するには、付加による発話解釈のコストに見合った相応の関連性（認知効果）の見込みが必要であると考えられる（通常、対話場面において単にある事態を「～と認識している」といった話し手の命題態度が存在することを明示するためだけに「ぞ」を付加するといったことは考えにくい）。

以下の(75)は、(19)の例と同様に話し手の認識を問う疑問文に対

する応答文に付加された「ぞ」の例である。

(75) (2人で夏の島に行こうと千鳥を誘う相良)

相良：どうするやっぱりやめておくか？

千鳥：変なことしない？

相良：変なことはしないぞ。

千鳥：危なくない？

相良：危なくもないぞ。

千鳥：いいわよ。どうしてもっていうならつきあってあげても。

テレビアニメ『フルメタル・パニック』

第18話「深海パーティー」

この(75)は、「相良が変なことをしない」「(2人で夏の島に行くことが)危なくない」といった事態を前提として、聞き手が発話を関連性のあるものとして解釈するために必ず必要な想定を文脈から導出し解釈する必要があるといった発話ではない。また、認識事態に対する話し手の心的態度が存在するといったものでもない。

ただ、この場合聞き手は、話し手が有標の形式である「ぞ」を付加したことで(命題態度動詞の存在を明示したことで)、何らかの認知効果の存在を考え、「相良は千鳥に信用してもらいたいと思っている」「相良は千鳥に嘘を言っていないことを信じてもらいたいと思っている」「相良は千鳥と一緒に来て欲しいと思っている」などの想定を導出する可能性がある。話し手は、ある1つの明確な推意(強い推意)の導出を意図はしていないが、上記のようなある範囲の推意(中間的な推意)を導出することを意図して「ぞ」を付加したと考えられる<sup>13</sup>。

以上、対話場面において「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度を明示する機能を有する「ぞ」がどのように用いられるのかをみた。本節で検討した3つめの機能の「ぞ」は、対話場面において(19)のように単にある事態を「～と認識している」といった話し手の命題態度が存在を明示し、命題態度を含む想定 of 復元を意図して付加さ

れる。その際、多くが(75)のように命題態度動詞の存在を明示することである範囲の推意を導出することを促すことを意図して付加されることを確認した。最後にこの機能を有する「ぞ」の使用例を提示しておく。

(76) (久しぶりに帰ってきたティナを囲んで飲み会をやることになる。その席でティナはお土産のお酒をふるまう)

ティナ：旅の途中で親切にしてくれた人がつくったお酒。

妙子：お酒ですか、それ？

佐藤：うわーうさんくさい感じがすなあ。

鈴木：なんか危険な色してるぞ。

薫：飲めるのかティナ。

テレビアニメ『藍より青し』

第5話「朋友-ほうゆう-」

(76') 話し手は、お土産のお酒が危険な色をしていると認識している。

(77) 鈴木は、お土産のお酒を飲むことを警告している。(中間的な推意の例)

(78) 鈴木は、お土産のお酒が飲めるかどうかティナに確認を求めている。

(79) 鈴木は、お土産のお酒を飲みたくないと思っている。

(80) (地中から宇宙船が発掘される、その艦長を任されるロラン)

グエン「ローラ、この乗り物は任せたぞ」

ロラン「任せるって？」

グエン「艦長をやらせるからこの乗り物を使えるようにしてくれ」

テレビアニメ『ターンAガンダム』

第19話「ソシエの戦争」

(80') 話し手は、グエンがロランに発掘された乗り物を任せたと認識している。

(81) グエンはロランに期待している(中間的な推意の例)

(82) グエンはロランに任せれば問題ないと思っている。

(83) 乗り物の管理は、大変な仕事である。

#### 4. おわりに

本稿では、終助詞「ぞ」について、その使用条件・使用制約について記述し、意味・機能を規定した。

具体的には、「ぞ」は、基本的機能として「～と認識している」といった話し手の命題に対する態度（命題態度）を明示すると規定した。また、その基本的機能には、現れ方の異なりとして、次の3つの機能が確認された。まず、①文脈から関連する何らかの想定が導出可能である事態を認識したことの明示化、次に、②認識事態に対するある種の心的態度が存在することの明示化、そして③「～と認識している」といった話し手の命題態度の存在の明示化である。ただ、本稿で規定した「ぞ」の機能で、すべての現象を説明できるわけではない。最後に残された問題について触れ、本稿の結びとする。

まず、「ぞ」は、通常普通体の文に後接されるが、なぜ丁寧体の文に後接する例が少ないのかといった「ぞ」が後接する文の文体について十分取り扱うことができなかった。

さらに、使用状況で指摘した、「ぞ」が意志を表すシヨウ形の表現形式に後接する場合、対話場面に限られるといったことや、他のモダリティ形式に比べ「だろう」が「ぞ」の後接をさせにくいといった現象についても説明を要する問題である。

またSNSなど打ち言葉においては話し言葉では見られにくい丁寧体の文や「だろう」との後接が、頻繁ではないものの観察されるが、この使用は「ぞ」が有する機能から要請され付加されるのか、それ以外の要素（役割語などの、ある特定の人物像を想起させるために付加されるのか）によるものなのか検討していく必要がある。

上記にあげた問題は、本稿の終助詞が発話解釈に対する意図を示す機

能を有する形式であるといった立場からでは解決の糸口が見えてこない問題である可能性もあり、さまざまな観点から本稿で提示した用例やデータを分析しなおす必要もあるだろう。

## 5. 参考文献

- 上野田鶴子 (1972) 「終助詞とその周辺」『日本語教育』17号
- 奥田靖雄 (1983a) 「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房
- 奥田靖雄 (1983b) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房
- 金水 敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞-用法と実例』国立国語研究所
- 佐久間鼎 (1940) 『現代日本語法の研究』厚生閣
- 佐治圭三 (1957) 「終助詞の機能」『国語国文』26,7
- 時枝誠記 (1951) 「対人関係を構成する助詞、助動詞」『国語国文』20,9  
京都大学国文学会
- 中崎 崇 (2004) 「終助詞「ぞ」の機能についての覚書」『日本語・日本文化研究』第14号 大阪外国語大学日本語講座
- 中崎 崇 (2005) 「終助詞「ヨ」の機能に関する一考察」『語用論研究』第7号 日本語用論学会
- 中崎 崇 (2007) 『現代日本語終助詞の研究』博士論文 (大阪大学)
- 西山佑司 (1999) 「語用論の基礎概念」岩波講座 言語の科学7『談話と文脈』岩波書店
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野田春美 (2002) 「終助詞の機能」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』岩波書店



- 森山卓郎 (1997) 「「独り言」をめぐって —思考の言語と伝達の言語—」  
川端善明・仁田義雄 (編) 『日本語文法 体系と方法』 ひつじ書房。
- Blakemore Diane (1992) *Understanding Utterances: An introduction to pragmatics*. Oxford: Blackwell. (武内道子、山崎英一訳 (1994) 『ひととは発話をどう理解するか』 ひつじ書房)
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (内田聖二、中達俊明、宋 南先、田中圭子訳 (1993) 『関連性理論—伝達と認知—』 研究社)
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (内田聖二、中達俊明、宋 南先、田中圭子訳 (1993) 『関連性理論—伝達と認知—』 第2版 研究社)

---

<sup>1</sup>具体的には、終助詞を「発話を話し手が意図した通りに解釈するために聞き手に示された道標の役割をする形式」としてみる考え方である。この、ある言語形式が発話解釈の指標を示すといった考え方は、言語表現によってコード化 (encode) される情報には、基本的に2つのタイプが存在するという語用論、特にSperber and Wilson (1986) (1995) によって提唱された「関連性理論 (relevance theory)」の考えに基づいている。

<sup>2</sup>本稿は、前稿中崎 (2004) での議論を精緻化し、用例を加え修正したものである。

<sup>3</sup>実際の用例としては、聞き手が存在する対話場面に限られる。その理由を含め、シヨウ形との後接については問題が存在する。

<sup>4</sup>奥田 (1983a) (1983b) は、認識活動について、視覚活動、聴覚活動、嗅覚活動、味覚活動、触覚活動などによる「感性的な経験」と、思考活動、その結果である理解があるとしている。本稿では奥田のこの考えをふまえ「認識」といった用語を用いる。

<sup>5</sup>「想定 (assumption)」とは、個人が現実世界の表示として扱う概念表示のことをいう。本稿でも想定をこの意味で使用する。また「話し手が発話時に認識した (している) 事態」のように「想定」のかわりに「事態」といった用語を用いることがあるが、事態も想定の一つと考え、同じ内容を示す用語とする。

<sup>5</sup> 認知環境とは、その時点で個人が、知覚可能か推論可能な (頭の中に思い浮かべることができる) 事実すべての総和のことをしめす。

<sup>6</sup> 本稿は、意志表出の文についても事態認識を表した文と考える。「よし来年は執行委員長になるぞ」であれば「話し手が来年に執行委員長になる」といった事態を「～と意思立つ」「～と企てる」わけであり、これらもある種の事態の知的な認識と考えられる。この場合の「～と認識している」とは、「～と意思立つ」「～と企てる」といった知的な認識を示している。

<sup>7</sup> この場合の「～と認識している」とは、「～と意思立つ」「～と企てる」といった知的な認識を示している。

<sup>8</sup> (45) や (46) は、(42) をもとに推論の前提との相互作用によって導出された想定である。(45) や (46) は、関連性理論における文脈含意 (当該の発話から直接導出されず、既存の想定との相互作用により、推論導出される想定) と考えられる。このことから「ぞ」が付加される事態とは、「文脈含意を生じさせる想定 (事態)」と言いかえることもできる。

<sup>9</sup> 認識事態に対して「驚き」「不満」などある種の心的態度が存在する場合の付加される「ぞ」は、「ぞお」といった伸ばす音調を伴うことが多い。これは、中崎 (2005) で指摘した「よ」の機能の一つである「当該の発話が発話に対する話し手の心的態度 (遺憾・不快等) を有していることを述べる」と共通した特徴である。

<sup>10</sup> 「推意 (implicature)」とは、いわゆる言外の意味のことであり、厳密には元の発話の言語的意味の解釈と発展により直接得られない、発話の表意と文脈との相互作用により導出された想定を指す。

<sup>11</sup> 認知効果 (cognitive effect) とは、関連性理論の用語で、個人の世界に関する知識を向上させる作用のことを指す。認知効果を得られるケースは、文脈含意 (当該の発話から直接導出されず、既存の想定との相互作用により、推論導出される想定)、既存の想定強化 (既存の想定を裏付ける証拠が与えられることによって、既存の想定が強められること)、既存の想定放棄 (既存の想定と矛盾するような証拠が与えられることによって、既存の想定が放棄されること) の3つがあるとされる。この認知効果を得るための労力が低ければ低いほど、発話の関連性 (relevance) は高くなり、逆に労力が高ければ高いほど関連性は低くなる。

<sup>12</sup> 中崎 (2005) で記述した「よ」の3つの機能のうちの1つである「言述、命じ、尋ねといったいわゆる発話の力 (illocutionary force) を話し手が聞き手に強調する」のことを指す。

<sup>13</sup> 推意の強さには段階性があり、話し手が聞き手に導出するように促す推意の強さにも段階制がある。このことは、明確に1つめの機能の「ぞ」と3つめの機能の「ぞ」との間に境界を引くことが難しいことを意味している。

就実表現文化

第十四号(通巻第40号)(非売品)

令和二年一月二十七日 印刷

令和二年一月三十一日 発行

編集兼  
発行者  
就実大  
表現文化学  
会

〒538-5526

岡山市中区西川原一丁目一

電話〇八六二七一一八一一代

印刷所

旭総合印刷株式会社

〒760-0820

岡山市北区内山下二丁目〇一三

電話〇八六二二二二一三三一一代